

達人列伝 濱田隆士 (1933.2.3～2011.1.19)

前田, 晴良
九州大学総合研究博物館

<https://hdl.handle.net/2324/6769061>

出版情報 : Fossils. 101, pp.81-83, 2017-03-31. 日本古生物学会
バージョン :
権利関係 :



化石友の会コーナー

友の会トピック（特別寄稿）

達人列伝 濱田隆士（1933.2.3～2011.1.19）

前田晴良（九州大学総合研究博物館・日本古生物学会会長）

はじめに

“化石学”の達人：濱田隆士（東京大学・放送大学名誉教授）が他界してはや6年の歳月が流れた。専門の三葉虫やサンゴのみならず、あらゆる分類群に精通し、多様なジャンルに挑戦し続けた博覧強記の人物であったことは記憶に新しい。また、陸上競技に親しみ、フィールドにおいてはプロ・アマ融合の共同研究を主導した異色の研究者としても知られる。

濱田隆士を評価し、その全貌を語るという大役は、当然ながら直接薫陶を受けた故人ゆかりの方々にお任せすべきであろう。筆者は、濱田の「正史」を書く資格も能力も持ち合わせていない。しかし直接師事したことのない筆者にも、学生時代から濱田とは不思議と接点があり、さまざまな思い出がある。本稿は、あくまで傍流の視点から記した「民間伝承」のひとつとしてご覧いただきたい。濱田の経歴や研究内容の詳細については、濱田ゆかりの著者による優れた追悼文が「化石」90号に掲載されているので、ぜひご参照いただきたい（佐野, 2011）。なお、文中では敬称を省略させていただいた。

トリミングの凄技

筆者が濱田を初めて“達人認定”したのは、筆者が東大教養部の学生時代（1, 2年生）に参加した野外地質巡検の時であった。陽が傾き、そろそろ帰り支度を始めようという時、引率した濱田は採集した岩石サンプルを左手に持ち、右手に握った小さなハンマーでトリミングをし始めた。その凄技に思わず目を見張った。にこやかに談笑しながら濱田が軽く数回ハンマーを振るうだけで、硬く緻密な結晶片岩や火山岩も、軟らかく脆い頁岩も、彼の掌の上ですべて同じサイズと形（≒四角形）に姿を変えてゆく。やがて濱田はそれらを新聞紙で手際よく包み始めたが、包み終えたサンプルは工場出荷直後のロットのように整然と並び、外見からはどれがどれだか全く見分けがつかなかった。

ひるがえって筆者が採集した岩石サンプルに目をやると、形や大きさが著しく不揃いで、しかも表面はハンマーの打撃痕で傷だらけ。彼我のハンマーの技量に天と地ほどの差があることを思い知らされた。後日、濱田に岩石

を割るコツを尋ねると、「君、ハンマーはね、石を割るものではなく石を切るための道具なんだよ」と答えてくれた。

あれから35年以上たち、筆者も場数だけは踏んだ。巡検では「ハンマーで石を切れ!」と学生を叱る。しかし「あの時の濱田の技の境地に到達したか?」と問われれば、残念ながら沈黙して赤面するほかはない。

青春のモニュメント

濱田隆士がいた宇宙地球科学教室の研究棟は、東大駒場キャンパスの北西、野球場やグラウンドのすぐ近くにあった。教養部学生の時、横倉山のシルル系に巡検に行くことになり、事前に産地情報を教えてもらおうと濱田の研究室を訪ねたことがある。突然の訪問にもかかわらず、濱田は嫌な顔ひとつせずに対応してくれた。調子に乗った筆者は「先生の論文の別刷を下さい」と厚かましい要求を重ねた。地質学雑誌に掲載された伝説の名著「西南日本外帯ゴトランド系の層序と分帯」（浜田, 1959）のオリジナルが欲しかったのである。

「いいよ」と濱田は気軽にうなずき、「あった、あった」と言いながら1編の別刷を書架から抜き出してきてくれた（図1）。筆者がそれを受け取ろうと両手を伸ばした瞬



図1. 濱田隆士から手渡しでいただいた地質学雑誌の別刷（表紙中央部の拡大；浜田, 1959; 日本地質学会）。いまにして思うと、著者直筆のサインを貰わなかったことが悔やまれる。当時、日本では「ゴトランド系」の呼称がよく使われていたが、1960年にコペンハーゲンで開かれた万国地質学会議（IGC）での投票の結果、僅差で「シルル系」が採択された。

間、何を思ったか濱田は急に別刷を引っ込め、表紙をしげしげと眺めながら次のような名言を吐いた。

「これはね、ぼくの青春のモニュメントなんだよ……」

肩すかしを喰らった筆者は、「なんてキザなセリフを吐く人なんだろう」と呆氣にとられ、貰うべき別刷だけ貰ってさっさと退散した記憶がある。

ところが、時がたつにつれて濱田のことばの意味が理解できるようになった。「西南日本外帯ゴトランド系の層序と分帯」(浜田, 1959)は、濱田が小林貞一(矢島, 2017: 本号の口絵を参照)の指導のもと、東大の大学院生時代に全身全霊を込めて取り組んだ研究の集大成なのである。大学院生当時、濱田は宮崎県鞍岡村(現在の五ヶ瀬町)の寺に下宿し、シルル系石灰岩体がそびえ立つ祇園山の調査に毎日必死に取り組んでいた。地元の人たちは、濱田の情熱あふれる調査研究ぶりについて、次のような証言を残している。

「朝早くから山へ入り、夕方暗くなってから山から下りてきて、夕食もそこそこに調査結果の整理をされていました。両手に数本の色鉛筆をはさんで地図に塗りまくり、わしらにはわけの解らぬ色つき地図が次第に出来上がって行きました。」(足立, 1974, p.209)。

濱田に限らず、卒論や修論・博論のころ、費用対効果を一切省みず、例えばフィールド内の全ての枝沢を詰めるなどという無謀な目標を立てて、ただ夢中で地質調査した経験をお持ちの読者も多いのではなかろうか。知識や経験にまだ乏しく、費用対効果は悪かったかも知れない。しかし、自立した研究者としての自信は、このような“採算を度外視した努力と熱意”によって初めて得られるのではないかと思う。

一方、濱田のひたむきさは、地域の人たちの心に響いた。濱田が地元の人たちにとって単なる宿泊客以上の存在だったことは、上記の証言から明らかである(足立, 1974)。数年前に筆者が祇園山に調査に訪れた際、少なからぬ地元の方々が、いまだに濱田のエピソードを口々に語ってくれたのには驚いた。濱田との交流の思い出は、今も五ヶ瀬町の人たちの心の中に「不朽のモニュメント」として残されているのであろう。大学院の研究終了後も、お世話になった地域の人たちとの交流が生涯にわたって続いたのは、濱田が真のフィールド科学者であったことを示す何よりの証拠である。

原色化石図鑑

北海道のフィールドで採集したアンモナイト化石を見せびらかしに、濱田の研究室に押しかけたことがある。ところが濱田は、筆者自慢のアンモナイトには目もくれ

ず、代わりにノジュールの脇についていた海綿の化石に目を留めた。そのとたん、濱田は堰を切ったように熱く語り始めた。話は海綿の生活様式に始まり、硬骨海綿や層孔虫、さらにケーテスとの類縁関係にまで及んだ。筆者は「海綿化石の研究も面白いかも……」と、危うく洗脳されそうになったことを鮮明に覚えている。

濱田は、あらゆる分類群に精通し、しかもそれぞれについて学問的なチャームポイントを的確に切り取り、語ることできた希有の人材だった。その真骨頂が凝縮されているのが、アマチュア鉱物学者・益富壽之助とともに著した保育社刊の「原色化石図鑑」である(益富・浜田, 1966; 図2)。初版が世に出てから半世紀を経た今も、この図鑑には別次元の存在感がある。その理由は、カラー図版を多用した初の図鑑であること(佐野, 2011)と同時に、個性豊かな脇役陣の登用にあると筆者は思う。筆石、スリッパサンゴ、アトリパ(腕足類)、コニユラリア(刺胞動物)、アルキメデス(コケムシ)、ミッチア(石灰海藻)、貝蝦(エステリア)、厚歯二枚貝、キカデオイデア(ベネチテス類)……濱田は、当時日本ではまだ無名に近かったこれら大部屋の役者達を大胆にも檜舞台に抜擢し、「読み物」としても楽しめる画期的な脚本を書いた(佐野, 2011)。その期待に応え、彼ら名脇役たちは、その魅力を誌面で存分に発揮し、恐竜やアンモナイトなどの主役を喰いかねない存在感を示している。

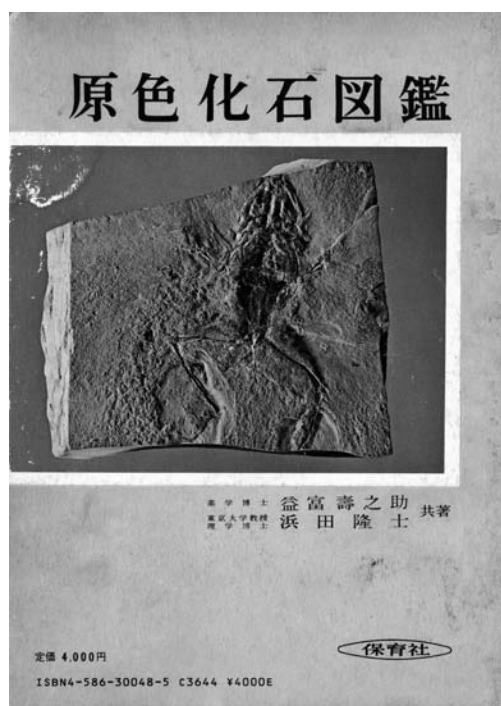


図2. 保育社刊・原色化石図鑑(益富・浜田, 1966)第13刷(1982年)の箱絵。塩原層群産の軟体部保存のカエル化石が箱絵に使われている。半世紀前、慧眼の濱田はすでに日本の化石鉱脈に着目していた。保育社(株)のご厚意により、同社の許諾をいただいて転載。

このキャスティングは見事と言うほかない。濱田でなければまず思い浮かばなかったであろう。また濱田だからこそ、一癖も二癖もある連中を役者として使いこなすことができたのだと思う。テンタキュライテス（所属不明）にスポットライトを当て、その個性を活かした「あて書き」を書いて舞台に送り出す自信は、残念ながら筆者にはない（益富・浜田, 1966, p.43-44参照）。学者にもさまざまなタイプがいるが、濱田が研究者としての優れた資質に加え、プロデューサーとしての卓越した能力を備えていたことは間違いない。それにしても本書が、濱田がまだ30代のころに書き上げたものだと聞いては、ただ脱帽である。後年刊行された小学館・日本の化石（自然観察シリーズ17；浜田・糸魚川, 1983）も、濱田ならではのキャスティングが光る1冊である。

余談だが、濱田が著した原色化石図鑑は、数多くの善良無垢な若者を「化石地獄」に墜としてきた“黒歴史”を持つ。本書9ページにある「三葉虫はミツバムシではない」というくだりは、その筋では特に有名で、聖典中の祈りの一節として密かに暗唱されているほどである。本書の信徒の心には、「サンヨウチュウ」より訓読みの「ミツバムシ」の方がなぜか心地よく響く（佐野, 2011）。そのためこの一節は、仲間うちで符牒としてよく使われる。その一方で、原色化石図鑑の隠れ信徒をあぶり出すための「踏み絵」としても極めて有効である。試しに日本古生物学会の会場で「ミツバムシ！」とひと声叫んでカマをかけてみていただきたい。もし周囲に異様な反応（＝ミツバムシ反応）を示す者がいたら、それはまず間違いなく濱田の原色化石図鑑に洗脳されて“石道”に墜ちた哀れな犠牲者である。かくいう筆者もそのひとりだ。

濱田隆士コレクション

化石や古生物をプロデュースする才能という点だけに限ってみても、濱田には最低でもあと10年や15年は活躍し続けて欲しかった。一方、喜寿を迎えてなお新しいテーマに挑戦しようと集めた膨大な標本を遺したまま逝った濱田自身も、さぞかし無念だったであろう。濱田の逝去後、自宅に残された膨大な標本・資料は、一時は保存が危ぶまれた。しかし、遠藤秀紀（東京大学総博）、

萩谷 宏（東京都市大学）、佐藤たまき（東京学芸大学）ら関係者の努力により、濱田コレクション全体が東京大学総合研究博物館に集約され、散逸を免れたのは何より幸いであった。

つい先日、東京大学総合研究博物館がリニューアルし、1階の常設展示室の一角に「濱田隆士コレクション」のコーナーが設けられた。膨大な濱田コレクションのごく一部であるが、天井までうず高く積み上げられたモロブタの山に埋もれて、産地から直送された状態の標本がそのまま展示されているのに目を奪われる。故人ゆかりの方々はずいぶんご覧いただきたい。

これを契機に「濱田コレクション」の学術的な整理が進み、将来的には特別展の開催などを通して、博覧強記の達人：濱田隆士の功績が末永く語り継がれることを願って止まない。

謝辞

本稿をまとめるにあたり、佐野晋一博士（福井県立恐竜博）、川辺文久博士（文部科学省）、矢島道子博士（日本大学）、および前田陽子氏（福岡市）には、初稿の改良を含むさまざまな面でご協力いただいた。

濱田隆士コレクションの保全に尽力された方々のご努力に対し、心から感謝と敬意を表します。最後に、濱田隆士先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

文献

- 足立富男, 1974. そそり立つ祇園山. 西澤 勇・岩島幾芳 [編], 化石風土記, 209-211, 樹石社.
 濱田隆士, 1959. 西南日本外帯ゴトランド系の層序と分帯. 地質学雑誌, 65 (11), 688-700.
 濱田隆士・糸魚川淳二, 1983. 日本の化石（自然観察シリーズ17）, 166p., 小学館.
 益富壽之助・浜田隆士, 1966. 原色化石図鑑. 268p., 96pls., 保育社.
 佐野晋一, 2011. 濱田隆士先生の御逝去を悼む. 化石, (90), 63-66.
 矢島道子, 2017. 小林貞一から21世紀への贈り物. 化石, (101), 口絵.

（2016年12月9日受付, 2017年2月1日受理）

